

織田信長（1534－1582）は、山のふもとの谷間を流れる2つ谷の両側に宮殿を建てた。建物や庭園のためにより多くのスペースを得るために、傾斜地にテラスを造成した。その最も高いものと最も低いものは、最大30メートルも離れていた。

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイス（1532－1597）は、彼の著書「日本の歴史」で、彼は城の驚くべき大きさと荘厳さについて述べている。城の一階部分だけで15から20部屋もあった。妻は2階に住んだ。3階はお茶会用のスペースで、4階は街とその周辺を見渡すために使われていた。この構造物の屋根瓦の破片から、屋根が金箔の瓦で覆われていたことがわかった。考古学的発掘調査により、この住居はかつて5～6つの異なる装飾庭園に囲まれていたことも確認された。